

年)のことである。当時数学と物理とは別々に年會を開いていたが、数学は四月の初めにあつたようである。四月三日が神武天皇祭という祭日であつて、その頃であつたように記憶している。しかも東大であつたのである。当時の数学教室は今の理学部本館の新館にあたる所にあつて、建物の大部分は物理が使つていた。真中に大きい階段教室があつて、今図書室になつている方角のあたりの二階の角の教室で、二年三年の講義があり、別にみすぼらしいバラックの教室で、一年の講義と聴講者の少ない講義があつた。この二階の角の教室で数学の年會があつたものである。40名か50名集つたであろうか、一教室で二日にわたる年會であつた。第一日が済むと晩に會食があつた。私が卒業して入會した年の會食では、高木先生が‘もう近いうちに停年になる’と挨拶されて、驚いたことであつた。しかし当時先生はまだ五十までに二、三年はあつたので、1920年には主著が現われ、この年會の直後には相互法則に関する大作が出たので、先生にとつて最も記念すべき時期におられたわけである。当時東大で教授の停年制が問題になり、藤澤先生あたりが強硬に主張されて、此年の三月例を示して退職されたので、高木先生があのようなことを仰せられたのであろうか。私は其後九大に赴任し、2年経つて東大に帰つてから外遊するまで3年ばかりの間は、学会の雑務をみていたが、物理の方でたいいことは片付けてくれたので、たいした仕事ではなかつた。学会が今日のように大きくなつたのを見ると、まこと

に今昔の感に堪えない。数学物理学會は、毎月集會を催していたが、戦後数學會になると、これは止めになつている。

雑誌においても、数学と物理が一緒に、数学の論文は一部分に過ぎなかつた。当時数学の欧文誌は、東大・京大・東北大の理学部機関誌の外、東北数学雑誌と数学物理学會誌だけであつた。學術研究學議(學術會議の前身と見做すべきもの)が数学輯報を出し初めたのは、1924年のことで、これは数学専門の雑誌であつたから、当時はこの方に力作が集つたようである。今日輯報よりも學會誌の方が盛んであるのと、対蹠的である。學會誌が盛んになつたのは、物理と分離したことが、主な理由の一つに相違ない、私が入會した時に、既に分離の話はあつたのだが、実現できなかつたのである。数学物理学會が創立された時には数學者の方が多かつたのに、次第に物理學者が増して、分離しなければならない状況に来ていたのに、資産の分割等のことに拘つてできなかつたのが、戦後やつと分離独立することになつた。それにしても以前の方が気分はのんびりしていた。これは数學者の数が少なかつた所為もあるであろうが、戦後學術會議が出来て、學會というものがこれを中心にして學術行政的色彩を持つことになつた所為もあるようである。

数學會の歴史は、日本の数学の發展史でもある。80周年ということで、想ひ出の拙文を書き纏めようとする、間もなく停年退職の自分の過去が想ひ出されてまことに感無量である。

回 想

清 水 辰 次 郎

日本数學會はその前身である日本数学物理学會、東京数学物理学會、更に数學會社の時代から八十年になる由である。私の東京大学入学は大正九年七月であるから私はその当時以来よりしか知らない。入学後二、三年頃毎年四月に日本数学物理学會の年會なるものが開かれそこで数学や物理学に関する研究が發表され、それが我邦唯一の専門學會であることを知つた。

その頃のことは記憶のはつきりしない部分もあ

るが年會は東京大学で数学と物理学とは別々に別れて發表があつた。二、三年たつうちに数学の發表にこられる方々は大体同じような方々であることに気がついた。しかしその当時の研究發表の数は全部で十五から二十位のものであつた。主な方々は私達の先生である高木貞治、吉江琢児、竹内端三の諸先生、その他には東北大学の藤原松三郎、窪田忠彦両先生と当時東京文理科大学にこられた掛谷宗一先生などである。その他私の記憶に

ある方々は黒河龍三先生、太田鶴三郎、岡田良知、二川道次、竹中暁、龜田豊治朗等の諸氏である。

大正十三年私は大学を卒業して本会に入会して正式に年会等に出席、発表等をしたが東京大学の数学教室は五人の先生方を除くと末綱恕一氏と私だけしかいなかっただので、すぐに年会の数学関係の世話などをさせられることになった。先日記録をしらべたところでは正式に学会の委員に選ばれたのは大正十五年（昭和元年）と昭和四年、五年とであるけれども、当時の数学関係委員には高木、吉江両先生や一高の辻、黒河両氏のこともあつたが実際の事務や毎月開かれた委員会には殆んど御出席がなかつたので末綱氏と私とが何等かの名目でそれらに出席しておつたように記憶している。

なかでも私は毎日、大学に遅くまでいた関係もあり私一人で数学方面の仕事をしたことが多かつた。昭和二年日本数学物理学会は創立五十周年を迎えることになったので物理関係の委員方と私達との委員会で何回か打合せをした結果、その記念の意味もあり、又年会や雑誌に研究発表をしない多数の会員へのサービスの意味もあつて同年はじめて邦文の日本数学物理学会誌を発行することになった。当時学会の事務を専らやつておられたのは物理の菅井準一氏であつたので同氏と私とが実際上の編輯にあつた。学会はそれ以前には日本数学物理学会記事という外国文の研究発表を主とする雑誌しか発行していなかつたのである。上の会誌の方は邦文で研究発表も載せるが総合報告とか論文紹介とかを主として全会員にサービスするという主旨であつた。同誌の第二巻には五十周年記念年会の演説が載つており古い時代からの本会の概略がわかるので御覧になるといいと思う。

日本数学物理学会と名称の変つたのは大正八年の由であるが当時毎月一回東京大学で例会があり毎月一回記事を発行していた。昭和二年からの会誌は年四回の発行であつた。例会の発表は殆んど物理の方々ばかりで、したがつて記事に載る論文も殆んどを物理関係のものが占めていた。数学には数学輯報という有力な発表機関があつたため学会記事にのる数学の論文は極めて少なかつた。しかし年一回の四月の年会には数学の研究発表は漸次増加して大正十三年以後昭和二、三年頃には前

に述べた方々の他に現在学会で先輩として数えられる方々が新しい研究者として発表に加わり、研究発表の数も三十を越す位になつていた。そして年会の出席者も数学関係だけで七、八十名位となつた。これでも現在からみると隔世の感が深い。

学会記事の発行は寄せられた論文を先生方と相談して編輯の方へまわすだけであつたが会誌の発行には少なからず苦勞した。学会記事が殆んど物理関係の論文で占められているので数学の一般会員へのサービスは会誌の数学の部分に限られている。当時の数学教室の陣容は極めて小人数であつたから、学生の方々の援助を受けながら辛うじて責をふさいできたにすぎない。先輩や後輩の方々に種々御依頼をしてみたり私自身も報告や紹介に努めたのではあつたが今からみればまことに不充分なものであつた。

日本数学物理学会もその後しだいに盛んになり昭和七年私が大阪大学へくる時分になると研究発表も数十を数え、会員数も著しく増加した。これは物理の方も同様であるが大正末期から数学科の出身者が急に増加したからのことである。学会では私の後では黒田成勝氏や中村幸四郎氏が委員として会のためにつくされたが、その後会は盛大になる一途であつた。しかし途中太平洋戦争という不幸な出来事があつたがやがて数学会は独立して日本数学会として今日の盛大さに至つているのは、まことに喜ばしい限りである。

以上はいわば公式の話であるが私の思い出にあたるものを少し書かせてもらうことにする。

日本数学物理学会は大正末期の頃からすでに年会のうちの一晩を山上御殿等で晩餐会にあてていた。しかし何分物理関係の方々が多人数なので数学関係の方々とは先生方とはともかくとして若い方々で出席される方は殆んどなかつた。それでそれとは別に、年会には東京在住のものばかりでなく各地方からの方々も多いので、いつの頃からかしらないが私の卒業のころには夕方数学関係者だけで晩餐会をするならわしになつていた。今はないが本郷三丁目の角に燕楽軒というあまり立派ではないが広いレストランがあつて多くそこで行われた。この会は非公式のものであつたが数学の先生方は非常によく集まれ年一回の会合として喜ば

れた。上述の高木、吉江、藤原、窪田の諸先生の他東大の中川銓吉先生、東北大の林鶴一先生、東京文理科大学の国枝元治先生、京大の園正造先生など殆んど毎年御出席になり中でも林、園、掛谷三先生はいつも話題の中心になられて極めて愉快的話がでてたのしい会であつた。それらの先生方の他に先輩後輩が多数、といつても実は二十名足らずであつたが、集まれた。何分、小人数なので親密の感が深くてよかつた。その点では現在の様に会が大きくなつてしまうと数学会という風に限定されながら同じ研究発表にきていても大部分の顔もしらないのとは大きなちがいであつた。その会はこういう集会のお好きであつた掛谷先生が主張されて開かれたものらしく私はその指図のもとで毎年幹事のような役割をしてきた。年会における研究発表よりもこの会合の方がたのしみであつたのは私ばかりではなかつたようである。このような会合は数年つづいたがそのうちに学会の方は漸次大きくなり会員も増加すると、この会に集まるものも一部の人々ということになり次第に意味がなくなつて、いつのまにか催おされなくな

つてしまつた。惜しいというよりは会が発展したのだと思えばあきらめのつくことであろう。

そしてその代りに学会の正式の晩餐会へ数学の方々も、勿論一部の方々ではあるが、でるようになり、私もこの会へはよく出席した。私が大阪へきてからこの会ではよくテーブルスピーチなどやらされたが、最も思い出の深いのは、たしか五十周年記念のときの会ではなかつたかと思うが、藤澤利喜太郎先生が物理関係の大先輩の先生方とともに御出席になり、先輩としてテーブルスピーチをやられたことである。藤澤先生は私の学生時代の先生ではあるが、実は講義は一ヶ月しか受けず、そのうち私は病気をして休んでしまい再び大学へでたときは先生は既に停年で御退職になつていられたのでことさら印象が深かつたのである。

昭和八年から私は大阪へきてしまつて会の事務からは直接には、はなれてしまつたので、それ以後については書かない。それは若い方々がやつて下さつているので、それ以後の事は更にそういう方々に語つていただきたいと思うのでここで筆を擱く。

東京数学会社創立 80 周年に際して

彌 永 昌 吉

本年(1957)は、明治10年(1877)に本会の前身東京数学会社が創立されてから、ちょうど80年目に当たる。かつて昭和3年(1928)には、日本数学物理学会の時代であつたが、創立50年を祝する記念大会が行われ、席上中村清二委員長が会の歴史をかえりみ、力のこもつた演説をされた。その記録は、数物会誌第2巻1号に載つている。このたびは80周年を記念する集会は特に行われなかつたけれども、この機会に高木先生はじめ諸先生から本会の歴史に関するお話を伺うことができ、あるいは御寄稿をいただくことができ、われわれの反省の資ともなり、将来へのはげみともなるお言葉の数々を本誌に載せることができたのを喜ばしく思う。

会が永い歴史を経て来たことについては、われわれはまず諸先輩に感謝しなければならない。明治10年といえは、私たちの生まれるよりもずつ

と以前のことであるから、当時の社会情勢、あるいは世界のありさまについては、今日われわれに残された史料によつて想像するほかはない。察するに、当時、世界の学界とわが国の学界との水準の差は、大きなものであつたであろう。そのことを自覚しつつも、学問への深い熱意をもつて進歩への道を歩まれた開拓者の意気は、東京数学会社の創立者の一人である神田孝平の、東京数学会社雑誌第1号、'題言'からも読みとることができる。本号 p.10 には、その'題言'全文を掲載し、その後、今日までの会の変遷上の主な時期については、福富節男君の編集された年表を次頁以下に載せる。

日本数学会として独立したのは、昭和21年(1946)であつた。本誌第1号に当時の経緯に関する記事があるが、それから10年ばかりの間にも、社会あるいは学界の情勢がかなり変つて来てい